

# さんいん 企業物語

SAN-IN  
COMPANY STORY

## 丸

## 隆

### 1 地域への熱い思い

【会社概要】	
株丸隆／雲南市	
創 業	1972(昭和47)年
設 立	1977(昭和52)年
営業種目	イベント業、理美容業
資 本 金	1千万円
代表取締役社長	田中隆
従業員数	8人(パート)
所 在 地	雲南市大東町上佐世294
電話番号	0854(43)8181



子どもからお年寄りまで楽しめる巨大迷路「ドラゴンメイズ」と、考案者の田中隆社長＝雲南市大東町上佐世

1980年代に日本列島で一大ブームを巻き起こした巨大迷路。雲南市には今も、全国各地から多くのファンが訪れる山陰最大級の迷路「ドラゴンメイズ」があるのをご存じだろうか。運営しているのは、株丸隆（雲南市大東町上佐世、田中隆社長）。縁日の出前やイベント企画でスタートしたアミューズメント事業は半世紀以上の歴史があるほか、特産品開発や地域交流、福祉事業、理美容事業にも関わってきた。事業内容こそ多岐にわたるが、根っこにあるのは地域への熱い思いだ。アイデア社長の挑戦は、傘寿を越えた今も続いている。

#### 畑違いのイベント事業

農家の長男に生まれた隆（80）は中学卒業後、理美容専門学校、インターンを経て1962（昭和37）年に独立。理容師として技術を磨いていた隆が、まるで畑違いのイベント事業をスタートしたきっかけは、国の減反政策だった。

米農家に転作を支援するための補助金を支払い、過剰となった米の生産量を抑制する減反政策は60年代から試験的に実施され、71（同46）年に本格的にスタートした。理容業の傍ら家業にも携

わっていた隆も、転作を検討。そんな中、思いついたのがカブトムシの養殖だった。辺り一帯、草ぶき屋根が軒を連ねていた大東の町も、屋根を瓦や金属に替える家が増え、随所に不要になった屋根わらが置かれていた。「カブトムシの成育にもってこいの条件」。昆虫に詳しい地元の農業普及員から知識を得て、転作分約600平方メートルの地にわらを積み、カブトムシの養殖を始めた。

#### 商店街土曜夜市へ出店

隆の思い付きは、時代のニ-

ズにぴったりはまった。高度経済成長期、都市化の進行などでペットブームが起き始め、身近でなおかつ飼育が簡単なカブトムシは高い人気を誇りだしていた。隆の活動が全国紙の新聞で取り上げられると、各地の百貨店などから問い合わせが相次いだ。隆は、幼虫を温めて通常より早くふ化させるなど効率的にカブトムシを増やし、高まる需要に対応していった。

各地の商店街などで開催されていた「土曜夜市」へも出店。しかし、カブトムシは夏しか販売できない。そこで、依頼があった金魚

# 減反機にカブトムシを養殖 需要見込み巨大迷路設置も

すくいやヨーヨーなどもスタート。移動動物園やフワフワドーム、ロッククライミングなどの大型遊具も手がけ始め、隆は次第にイベント会場になくはならない存在となっていた。一分

からん、できらんはご法度。頼まれれば何でも引き受けていく中で、アイデアが広がり、事業が拡大していきましました」と振り返る隆。取引業者の増加を背景に、72（同47）年に丸隆物産（2003

年、㈱丸隆に組織変更）を創業、5年後に有限会社化した。

## 奥出雲公園での再出発

丸隆物産が本格的なアミュー

ズメント事業を手がけ始めたのは、86（同61）年夏。のちに日本全国にブームを巻き起こすことになる、ニュージールランド人ランズボロー氏発案の巨大迷路が同年4月、島根県匹見町に完成し、隆はオープン前日に現場を視察していた。

将来的な需要を見込んだ隆は、独学で勉強を始めるとともに、県外各地にできた巨大迷路を訪れ、松江市内に設計事務

所も開設。ついには、松江市のショッピングセンター敷地内に60坪四方もの迷路を完成させる。しかし、夏休みが終わるとともに親子連れで混雑したにぎわいはうそのように引いていき、残ったのは高い借地料や広告宣伝費の借金だった。

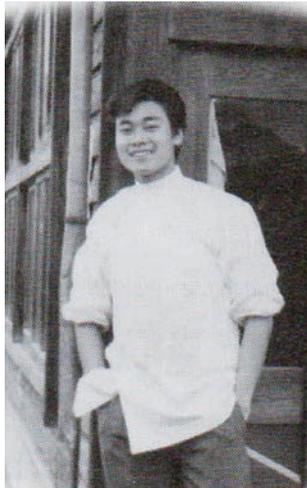
「散髪してでも返せる金額じゃない。この迷路を生かしてどこかで再出発できないか。島根県内をくまなく歩いて候補地を探し求めた隆が出合ったのが、冬季休園中だった県立ふれあいの里奥出雲公園（雲南市掛合町、97年閉園）だ。豊かな自然と広大な土地は、巨大迷路にぴったりの条件だった。

担当者らに掛け合い、公園の5周年記念イベントとして87（同62）年、松江で使った板塀をそのまま再利用して巨大迷路「ドラゴンメイズ」を設置。子どもから大人まで楽しめるユニークなアドベンチャーに多くの人が訪れ、右肩下がりがだった公園来園者も大幅に増加したため、2年目には2500平方メートルの規模に拡大した。その後も新たなアトラクションを次々と整備。地域活性化にも大きく貢献した。

（文中敬称略）

― 次号に続く ―

（フリーライター・門脇奈津子）



理事長として独立した当時の田中隆社長＝1962年ごろ



カブトムシ養殖をスタートさせた頃の田中隆社長＝1969年



農家の長男に生まれた田中隆社長がイベント事業を始めたきっかけは、減反政策だった＝1960年ごろの生家、手前は鶏小屋



松江市内のショッピングセンターに設置した巨大迷路＝1986年

# 丸 隆

## 2 政治の世界へ

【会社概要】

所在地 雲南市大東町上佐世294  
 営業種目 イベント業、理美容業  
 代表取締役社長 田中隆  
 従業員数 8人(パート)  
 電話番号 0854(43)8181



迷路のルートは田中隆社長が自ら設計。現在は、年4回変更し、リピーターも楽しませている＝雲南市大東町上佐世、丸隆

国の減反政策を機に始めたカブトムシ養殖から、地域の祭りの屋台や百貨店などへの出店を経て、イベント事業を手がけ始めた(株)丸隆(雲南市大東町上佐世、田中隆社長)。日本列島を駆け巡った巨大迷路ブームにも参戦し、本格的なアミューズメント事業を進めていった。

### 人気巨大迷路を閉鎖

豊かな自然と広大な土地がある県立ふれあいの里奥出雲公園(同市掛合町)に1987(昭和62)年、巨大迷路を設置。ユニークな仕掛けが随所に設けられた迷路は、幅広い年代に人気を博し、一時は同公園への進入路となっていた国道54号が渋滞するほどの来園者が訪れた。

翌年以降は規模も大幅に拡大し、人気のアトラクションバラエティーテレビ番組を模したセットや、コロンブスがアメリカ大陸

到達時に使った大型帆船「サンタ・マリア号」の迷路などに加え、ミニバイクのサーキット場、忍者屋敷など、隆(80)は次々に新たな迷路の企画を発案し、山あいの公園は週末を中心に多くの子どもや家族連れでにぎわった。しかし97(平成9)年、公園のリニューアル化などを理由に、11年間にわたって多くの人を楽しませてきた巨大迷路を閉鎖した。

ちなみに迷路閉鎖には、もう一つ大きな理由がある。隆が旧大東町の町議会議員に当選し、政治活動が忙しくなっていたのだ。農家に生まれ、理美容業と農業を兼業しつつ、イベント業に



県立公園内にオープンした巨大迷路は年々リニューアルを重ね、多くの家族連れなどでにぎわった＝1989年ごろ

も乗り出していた隆。縁もゆかりもなかった政治の世界に足を踏み入れたきっかけは、幼い頃から知る農業者から耕作放棄地

# 耕作放棄地活用相談受け 「大東町の福祉の丘」を構想

の活用を相談されたことだった。

「息子は農業を継がないので、うちの土地を使ってくれんか」と言われてね。代々守ってきた農地を手放すなんて、よほどの心境だと思ひ、地域にとつて有意義な使途を考えるようになったんです」

## 住民180人実現する会

周囲に相談するなどして考えを巡らせた結果、地域福祉の拠点に活用することを決めた。「当時の大東町は、町長が1期ごとに交代するような町だったため、政策の実現が難しく、福祉行政などは後回しにされていました」

## たと隆。

一方で、地域は高齢化や核家族化が進み、高齢者福祉充実の必要性が叫ばれていた。隆は「大東町の福祉の丘」建設構想を練り上げて、町内の各種福祉団体に訴えて回り89（同元）年、「大東町福祉の里を実現する会」を設立、地域住民総勢180人

が名を連ねた。

福祉行政に詳しい島根大教授らの協力も得て、基本計画書を作成して町長に提出。活動に熱が入る中で、自ら議員として町政に身をささげることを決意し、95（同7）年に初当選。その2年後、念願だった福祉の拠点「大東町地域福祉センター」が町の中心部に完成した。

## 自らも福祉事業を開始

地域福祉サービスの必要性を強く感じていた隆は93（同5）

年、丸隆物産（2003年に丸隆に組織変更）内でも福祉事業をスタートさせた。時は、介護保険制度が始まる7年前。ベッドなどの福祉用具のレンタルを希望する場合には、市町村の福祉事務所など老人福祉制度担当窓口に出向いて、サービス利用の申請手続きを行い、自治体が調査を行った上でサービス内容などを決定していた。

そんな中、福祉・介護用品の販売レンタル事業を開始。隆は自ら福祉用具専門相談員の資格を取得し、県外にまで出向いて仕入れ先を探し回る一方、行政の指名業者になるべく努力を重ねた。しかし、自治体と取引がある個人事業主は地方議員との兼業を禁止されていることから、町議就任後、福祉事業部は新たに設立した（有）マルタカ・メディカルサービスが担うこととなり、代表の座も知人に譲った。

町が運営する福祉拠点が完成し、89（同元）年から続けてきた住民運動は一定の成果をもたらした。一方で、農地を有効活用してほしいという知人の願いはかなえられていなかった。そこで隆は一人、自主財源で地域福祉の拠点づくりに挑み始める。それが「心の駅 陽だまりの丘」だ。

（文中敬称略）

——次号に続く——

（フリーライター・門脇奈津子）



「大東町福祉の里を実現する会」で住民運動を展開し、実現にこぎ着けた福祉センター建設現場を視察する田中隆氏（左端）ら  
11907年ころ、雲南市大東町内



社内にも福祉事業部を設置。のちにグループ会社となり、現在も運営を継続している=1993年、雲南市大東町内



忍者屋敷は、復活した現在のドラゴンメイスでも子どもたちに人気のアトラクションとなっている。雲南市大東町上佐世、心の駅 陽だまりの丘

# さんいん 企業 物語

SAN-IN  
COMPANY STORY

## 丸

## 隆

### 3 事業多角化

#### 【会社概要】

所在地 雲南市大東町上佐世294  
営業種目 イベント業、理美容業  
代表取締役社長 田中隆  
従業員数 8人(パート)  
電話番号 0854(43)8181



ユニークな仕掛け満点で子どもからお年寄りまで楽しめる巨大迷路「ドラゴンメイズ」。右は田中隆社長＝雲南市大東町上佐世

イベント事業の多角化から法人化を遂げた(株)丸隆(雲南市大東町上佐世)。近隣農家から農地の活用を依頼されたのを機に、社長の田中隆(80)は地域福祉の拠点づくりを目指して奔走し、町地域福祉センターの開設実現に貢献した。しかし当初想定していた農地は活用できなかったため、独自に動き始めた。

#### 宅老所スペースを設置

約5千平方メートルの耕作放棄地を農家から買い取り、造成工事をスタート。元々田んぼだった土地は液状化していて作業は困難を極め、完成までに4カ月を費やした。その後、約330平方メートルの平屋を建設。2000(平成12)年4月、地域福祉交流拠点「心の駅 陽だまりの丘」が完成した。

介護保険制度が同年スタートし、要介護認定を受けた高齢者が福祉サービスを選べる仕組み

はつくられた。しかし、地方ではまだまだサービスの種類や量が少なく、制度施行当初はニーズに十分応えられていたとは言い難いのが実情だった。

そこで、拠点内に高齢者を預かる宅老所スペースを設置。デイサービスのほしりのような場所だった。「見守りが必要な高齢者を抱え、仕事との両立に悩んでいる多くの共働き世帯を見聞きしていました。少しでも役に立てれば、と考えたのです」と隆。介護保険制度前夜、宅老所はさまざまなスタイルで全国各地に開設されていた。先進地に視察に向き、大東の町にも導入したのだ。

拠点内では、幅広い世代の交



耕作放棄地を買い取って、「心の駅 陽だまりの丘」敷地造成工事をスタートした＝1999年、雲南市大東町上佐世

流を狙って各種の文化教室や住民参加型のイベント、アトラクションなどを開催。わら細工やかづら細工の教室、陶芸、押し

# 交流拠点「陽だまりの丘」誕生 天然水ビジネスやツバキ園も

花、観葉植物教室などでは、子どもたちが地域の高齢者に教えてもらったり、地域住民らの交流の場になったりして、大いににぎわった。

## 全国名水の一つに選出

造成工事着手前のボーリング



「陽だまりの丘」では、わら細工教室など各種文化教室が開かれ、地域の交流拠点の一つとなっていた=2000年

工事で、敷地内に良質な水が湧くことが判明。当初想定した温泉掘削にこそ至らなかったものの、島根県環境保健公社に水質調査を依頼した結果、Ph約8.4のアルカリ性でミネラルも豊富にあることが分かった。そこで02（同14）年、天然水をボトル詰めして販売する工場



敷地内から湧き出る良質な水を生かし、ウォータービジネス事業にも参画。2003年ごろ、雲南市大東町上佐世

を建設。「奥出雲の銘水」「スサノオ」と名付けた自社ブランド製品に加え、OEMも行い、各地のコンビニエンスストアやスーパーなどで販売を進めた。全国展開を進める中で03（同15）年には増資を行い、㈱丸隆に組織変更。その後、05（同17）年には東京電力の生活情報サイトが

当時取り扱っていた全国の名水の一つに選ばれたことから、愛飲家が増加した。

地域福祉に注力してきた隆。新たに進出したウォータービジネス分野でも、その思いは行動へと移された。04（同16）年に発生した新潟県中越地震の際には、在庫品全てを2トトラックに積み込み、被災地まで自身の運車で運んだ。11（同23）年の東日本大震災発生時には、被災地への支援物資提供を受け付けていた陸上自衛隊出雲駐屯地に、500ト入りペットボトル12000本を持ち込んだ。

隆は「何かせずにはおられませんでした」と当時を振り返る。しかし、その年の11月、製造・販売を委託した業者のつまずきで廃業。10年に及んだ事業は、終焉を迎えることとなった。

## 隣接敷地を購入し拡大

地域交流の拠点を目指した「陽だまりの丘」にはさまざまな人が訪れ、そのことが多彩な事業展開へとつながっていった。05（同17）年、隣接する敷地の購入



600種2千本ものツバキが咲き誇るツバキ園=雲南市大東町上佐世

を依頼され、約8300平方メートルの丘陵地を取得。近隣にスポーツが少ないツバキ園の開設を狙い、専門家の指導を受けながら全国の産地から約800もの品種を集めた。現在は、600種2千本のツバキが、訪れる人の目を楽ませている。

そして07（同19）年には、巨大迷路が10年間のプランクを経て復活。新たな人の交流を生み出していくこととなった。

（文中敬称略）

——次号に続く——  
フリーライター・門脇奈津子

# さんいん 企業物語

SAN-IN  
COMPANY STORY

## 丸 隆

### 4 癒やしテーマパーク

#### 【会社概要】

所在地 雲南市大東町上佐世294  
営業種目 イベント業、理美容業  
代表取締役社長 田中隆  
従業員数 8人(パート)  
電話番号 0854(43)8181

耕作放棄地を活用し、癒やしのテーマパーク「心の駅 陽だまりの丘」を完成させた(株)丸隆(雲南市大東町上佐世)。時代やニーズの変化に応じて、提供するサービスや事業内容を変えつ

つも、社長の田中隆(80)が大切にしてきたコンセプトは常に揺らぐことはなかった。人と人のつながりや笑顔、コミュニケーションが、人々や地域のエネルギーを生み出すという思いだ。

#### 3万5千平方メートルに拡大

旧知の農家に活用を依頼されて購入した耕作放棄地を、地域住民が集う交流拠点「心の駅 陽だまりの丘」へとよみがえ

らせた隆の元へは、隣接地を所有する人から同様の申し出が続き、延べ面積は約3万5千平方メートルにまで広がった。

広大な敷地には、600品種、2千本が植わるツバキ園や、シヨウブとアジサイが咲き誇る1畝の和風庭園、オリジナルの癒やしスポットを巡るユニークな「巡礼コース」などがあり、多くの人を楽しませている。中でも全国的に注目を集めているのが、復活した巨大迷路「ドラゴンメイズ」だ。

雲南市掛合町にあった県立公園内での事業を中止して、はや10年が過ぎていた。「子ども頃、遠足で遊んだ経験のある人が今は親になり、わが子連れで来てくれるかもしれない」。そう考えた隆は

2007(平成19)年、約1千平方メートルの巨大迷路を設置した。従来同様、木製の板塀でルートを仕切り、四つのスタンプを集めながら、ゴールに向かうという仕組みだ。迷わずたどり着ければ約1キのコースだが、隆が自ら設計したルートは隠しド



建設中の新アトラクション前に立つ田中隆社長＝雲南市大東町上佐世、心の駅 陽だまりの丘



ヤマタノオロチをモチーフとしたセットは、今年オープンした新コースのシンボルになっている

# 人気の巨大迷路を復活、進化 「世界の国から10万人」目指す

アやシ一方通行など数々の仕掛けが施されており、簡単にはクリアできない。子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめるスポットとして、オープン当初から多くの家族連れらでにぎわうようになった。

## 約2千人が訪れた日も

ドラゴンメイズの人気の秘密の一つが、年に4回コースが変更される点だ。生粋のアイデアマンである隆が毎回図面

を引いて、リピーターでも楽しめるよう工夫している。迷路内にお化け屋敷やミステリーハウスを増設したり、大きなつり橋で空中散歩コースを導入したりするなど次々と新たなアトラクションを追加。23（令和5）年には、長さ5層の塩化ビニール製円管をヤマタノオロチに見立てた新コース「おろちのぬけがら地獄谷巡り」をオープンさせた。



出雲神話をモチーフにした、今年新設のコース「おろちのぬけがら地獄谷巡り」

コロナ禍中は、年間売上高の3割強を占めるGW期間の来園者が例年の8分の1にまで減少

するなど窮地に陥ったが、22（同4）年にはコロナ禍前に近い約3万人が来場。全国放送のテレビ番組で紹介されたこともあって県外からの観光客も多く、1日に約2千人が訪れた日もあった。冬季休園を経た24年春には、新アトラクション「アドベンチャーワールド宝島の冒険」もオープンする予定だ。

## ツバキの種で商品開発

現在、丸隆の売り上げの約8割をメイズ事業、残り2割を10代から携わっていた理美容業が占める。しかし、隆のあふれんばかりのアイデアは主要事業だけにとどまらず、さまざまな商品開発にも携わってきた。

スーパリーの店頭などで餅つき実演販売する「奥出雲神代餅」は40年以上継続したほか、縁起物として珍重されるマンネンタケ

や薬草アマチャヅルの栽培、飼いや直した経産牛の肉を使ったレトルトカレーの商品化も実現。カブトムシ養殖を機に縁ができた益田市内の郵便局長とタッグを組んだ「ふるさと小包」の企画は、たびたび好評を得てきた。

18（平成30）年には、「陽だまりの丘」に咲くツバキから採取した種を非加熱・生搾り製法で仕上げたオイル「叶椿油」を開発。さらにこのオイルに北海道産小豆や蜂蜜を加えたせっけん「叶椿」も生み出した。二つのツバキ



来春のオープンに向け、準備が進められる新アトラクション



ツバキ園で採れた種を使って開発したせっけんオイル

製品は今年から雲南市のふるさと納税返礼品にもリストアップされた。

創業以来、地域ゆかりのさまざまな事業を展開してきた丸隆。傘寿を迎えても、隆は今なお衰えぬパワーを発揮しつつ、思いを受け継いでくれる後継者を求めている。「苦労の蓄積が実を結び、陽だまりの丘は多くの人に愛していただける癒やしのテーマパークに成長してきました。目指すのは、世界の国から10万人。誰もが笑顔になれる癒やしの場を一緒につくってほしい」

（文中敬称略）

——おわり——

（フリーライター・門脇奈津子）